

声域とジェンダー

——宝塚歌劇における男役の声の低音化——

立命館大学 宮本直美

目的

2014 年は宝塚歌劇団の創立 100 周年にあたり、各方面でその歴史を振り返る行事や特集記事が組まれている。改めて説明するまでもなく、同劇団が作り上げた「男役」という様式とそれを中心とする舞台は独特のものであり、その意義は単に一部の熱狂的なファンの趣味・嗜好にとどまるものではない。しかしながら、宝塚歌劇に関する論考は未だにファン視線を払拭しきれておらず、アメリカの人類学者 J. ロバートソンが 1998 年に指摘した「劇団のオフィシャル・ストーリーをなぞる傾向」はなお続いていると言えよう。

本報告では、宝塚歌劇の文化史的意義を探究する一つの試みとして、男役の声域に注目する。これまでの宝塚論で取り上げられた男役とは、ほぼすべてがヴィジュアル面に関するものであった。すなわち、男装・断髪・メイクへの言及によって男役像が語られてきた。しかし他方で、現在の男役の声は例外なく「低音」であるのに対し、かつては「高音」、つまりソプラノだった——この事実はむしろ古いファンにはよく知られている。現在の男役が表現し、追求する「男性性」の要件には間違いなく「低い声」が含まれており、男役を志す者は早い段階から自身の声を低くする訓練を積んでいる。ファンもまた当然のように男役には低い声を期待する。「低音」はいつからどのように男役の構成要素となったのか。声の高低の問題から宝塚歌劇の男性性を考察するのが本報告の目的である。

方法

声の低音化を確認するために、1930 年代から 1970 年頃までの宝塚歌劇の主題歌ないしそれに準ずる楽曲を対象に、男役が担当した歌唱部分の音域の変化を分析する。男役の声の低音化については、しばしば劇団関係者からも「ブロードウェイ・ミュージカルの導入」が主たる根拠として挙げられるのだが、低音化傾向は 1967 年のブロードウェイ・ミュージカル初導入以前から始まっており、それを直接の要因と考えることはできない。劇場で女性が低音で歌うということは、つまり地声による発声で歌えるようになったということであり、その前提としてマイクロフォンの導入をの効果を吟味すべきであり、さらにまた歌謡曲界において女性歌手に見られた低音化傾向、そして男性歌手の低音ブームとの関わりも検討する必要もある。

結論

男役の低音が定着したのは 1960 年代であった。それは、1930 年頃に欧米のレビューというジャンルを導入した後に定着した男役のヴィジュアル・イメージと比較してみれば 30 年も遅れてのことである。このことから分かるのは、男役（男らしさ）といえは低い声、というようなジェンダー観は決して自明のものであったわけではなく、宝塚歌劇における男性性とは、ヴィジュアル面で確立した後も長らく高音の少女らしい歌声との共存によって維持され、ファンもそれを受容してきた、ということである。何度か試みられた宝塚男子部の構想が消えた後に低音化が始まったことも示唆的である。声域の変遷という問題は、宝塚歌劇とジェンダーの問題を考える上で、視覚面のみに注目してきた従来とは異なる視野を提供することになるだろう。